

解題

「演説」

原稿冒頭には「大正八年団子坂」とある。つまり、乱歩が弟たちと古本屋「三人書房」を営んでいた時期のものだということになる。

「団子坂三人書房時代」は、「貼雑年譜」によると、大正八年二月から大正九年十月で、数え年で二十六、七歳であった。大学を卒業した乱歩は、加藤洋行という商社や、鳥羽造船所に勤めたが、いずれも長く続かず、東京で古本屋を開くことにする。そのかたわら、「浅草オペラ後援会」「東京バック編輯」「支那蕎麦屋」など、様々な職を試みた時期でもあった。大正八年十一月には、鳥羽時代に知り合った村山隆と結婚もしている。

この時期に、乱歩はいくつかの映画論を書いている。また、大正十二年に発表される「二銭銅貨」の、筋書や草稿が作られたのもこの時期であった。こうだったものは「MOVIE」「EXTRAORDINARY」という封筒

に残されている。

それら以外の文章は、「LOVE&LIFE 団子坂時代」と書かれた封筒にまとめられている。「恋愛疾病論」「感想文」「自己弁護」「演説」「夢」「恋愛医学」といったもので、十数枚の原稿もあれば数枚のメモからなるものもある。

今回紹介するこの「演説」は、七枚の原稿からなる。他のいくつかの草稿と同じく、使用されているのは「電報頼信紙」の裏面である。封筒のリストでは「小品」と書かれていて、現実の出来事の回想というよりも、虚構を含んだものである可能性が高い。小説の一部として書かれたものかもしれない。

この文章が書かれた団子坂時代より数年前、早稲田大学時代の江戸川乱歩は、経済学を専攻していたが、政治にも関心を持っていた。乱歩が手元に残っていた当時の草稿には、たとえば「二個師団増設反対論演説草稿」などといったものもある。

また、「貼雑年譜」の、大学時代を扱った部分には「二個師団増設反対演説」という頁がある。

「大正二年十二月六日（大学部一年第一学期）当時世間ヲ騒ガセテキタコノ問題ヲ捉ヘテ、早大雄弁会ガ懸賞演説会ヲ催シタ。私ハ反対説ノ弁士トシテ登壇シタ。経済学カラ見タ非戦論ヲ根本ニシテ説イタノデア、ソノ演説草稿ガ今デモ残ッテキル。」

「其後ハ学究的ナコトガ面白クナッテ演説ナド軽蔑シダシタノデ研究報告ヲ喋ルコトハシタガ、演説ハ一度モシナカッタ。」

こういった記述があり、乱歩が学生時代に演説をした経験を持つこと、そしてそこから距離を取るようになったことがわかるのである。

このような学生時代の経験が元になって、この小品は描かれているのである。

乱歩には演説をした経験もあったことが「貼雑年譜」からはわかるのだが、この「演説」は、聴衆の側から描かれている。演説会の中で、その喧騒に吞まれつつも、そこから心理的に距離をとって、眺めるような視点で記述されているのが特色になっている。また、冒頭の朦朧とした

感覚を描く手つきは、のちの乱歩にも通じるようなものを見出すこともできるだろう。

後年、随筆「群集のなかのロビンソン」などで書いているように、乱歩は人混みの中での孤独感というものを意識していた。「彼にとつては、肩をすれすれの前後左右の人間共が、彼とはまったく違った世界の生きものであり、彼自身は人群れのあいだを一匹の狼が歩いている気持ちであろう。それは恐ろしいけれども、又異様に潜在願望をそそるところの気持ちである」。

このような感覚の萌芽が、この「演説」にもあらわれているように思えるのである。

落合教幸

（立教大学大学院博士後期課程）

演 説

昨日花見に狂った血潮が、まだ「納」しづまらぬ胸に鳴ってゐる様であつた。無数の蜂の巣が集つて、フワ／＼と枯枝に懸つた様にも、妙に蠱惑的な桜の下で、酒に酔つたのか、その蜂の巣の魔法に酔つたのか、男や女が、チラ／＼赤と黄と■青と原色の交響楽で踊つてゐた。世間一帯に春のモヤがボンヤリと漂つてゐた。突然、「譯の」エタイの知れぬたはごとを口走り相にしては、ハツとして我に返る様な氣候であつた。

彼の学校では、例によつて学生の演説会が開かれた。五百人位で恰度の講堂には、それ以上の学生達が入つて、三分一位は後の方で立つて、押し合つて居た。ダラシなく胸を開けて、汗と油で光つた黄色い皮膚を見せてゐる様な男が多かつた。バツトや朝日や、中には金口のエチプト巻などの煙で、講堂の天井は薄ボンヤリ見えて居た。後方のガラス窓からは、■その日の感情にそぐわぬ様な、ウララカな陽光が白く流れ込んでゐた。掛ける余地がなくて、立

ち重なつてゐる連中の背中が、耻しい様にマザ／＼とその光に照らし出されて、■それらの連中の首筋から「は」幽かな陽炎がメラ／＼と立昇つてゐた。

彼は講堂の中程にギッシリ押しつけられて腰掛けてゐた。「彼は」今といふ時が自分の全経験から切り離された様に、この場の有様が突拍子に感じられた。多人数の、大小高低様「々」な聲から生じる、一種呑気な雑音■の中に坐つてゐると、彼はその呑気さから、いつも気拔けの様な■「るのであ」つた。じいっと空虚の中へ落ちて行く様にも感じた。

『君、マッチをお持ちではありませんか』

■「彼は」ギクリとした。何人だつたか知らずと暫く考へた。そして『イヤ、持つてません』

と云つた。そして、アハンと喉のタ、ンを切る為めの咳をした。心臓がドキンくと鳴つてゐた。脇の下から冷たい重い水滴がツル／＼と肘の辺まですべり落ちるのを感じた。

サ／＼と湖水の面を突風が落ちる様な感じで耳を聳する様な拍手が起

つた。演壇の上に当日の司会者が現れた。少しはにんだ様に、目を光らせ、唇の尻を曲げた「四」「三」「二十位の、低能らしく口髭をかった男が、態と落ちついた様な不自然な口調で、「簡単に」開会の辞を述べて第一の登壇者を紹介した。

多少ヤケな拍手の鳴り止むのを悠然と待つて居た演説者が

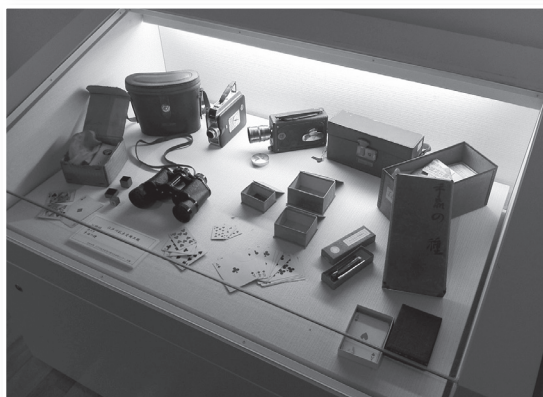
『諸君』と怒鳴つた。講堂の中がシンと静つた。

紺の着物を着た、お人よらしい、顔の平たい男が、出来る丈けの聲を振り絞つて、無骨な百姓手をイヤミに波打たせてジェスチュアをしながら、演説を始めた。

何を云はうとしてゐるのか、何を云ひつゝ、あるのか、少しも分らなかつた。時々胸の悪くなる様な身振りをして見エを切つたりした。その度に拍手と罵聲とが湧く様に起つた。

彼は聞いてゐる中に不安な気持ちになり始めた。彼■「一人」は演説者の不様さを笑ふことが出来なかつた。罵詈を平気で喋つたといふ傳記中の雄弁者になりすました様に、あつかましさを美德と心得た演説者

は、弥次られる程得意になつて怒鳴つた。



編集後記

▽「センター通信」第六号をお届けします。

▽二〇一一年度も乱歩に関連したいくつかのイベントがあり、大衆文化研究センターも協力いたしました。

▽夏には山梨市の根津記念館で「横溝 正史展『幻想と怪奇の系譜』」がありました（二〇一一年七月～八月）。乱歩に関連するものも展示されました。（上写真）

▽芦屋市の谷崎潤一郎記念館では「妖しの世界への誘い／谷崎・乱歩・横溝」という展示がありました（二〇一一年十月～十二月）。詳細については、学芸員の永井敦子氏に寄稿していただきました。

▽神奈川近代文学館では「作家と万年筆展」（二〇一二年一月～二月）があり、乱歩の「D坂の殺人事件」草稿も展示されました。

▽世田谷文学館では「都市から郊外へ——一九三〇年代の東京」が開催されています（二〇一二年二月～四月）。世田谷と関連した、様々なジャンルの作品が展示されています。世田谷を舞台とした「少年探偵団」や、乱歩が所蔵していた東京地図などが展示されています。

▽新聞・雑誌をはじめ、さまざまなメディアでも江戸川乱歩邸が取り上げられました。テレビ朝日「ちい散歩」（九月六日放送）で紹介されたほか、昨年度取材を受けた「週刊漫画グラフィック」連載の「東京シャッターガール」は、二〇一二年二月に単行本化されました（乱歩邸は第九話で紹介されています）。

▽二〇一二年三月現在、土蔵入口付近の補修工事がおこなわれています。扉部分を補強し、これまで以上に公開する機会を増やすことができますのではないかと思います。これについては次号でご報告できるはずです。

（落合）

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信 第六号

二〇一二年三月三十一日 発行
編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター

〒一七五〇一

東京都豊島区西池袋三三四—一
電話番号 〇三—三九八五—四六四一
（FAX兼）

E-mail: rampo@grp.rikyo.ne.jp

開室日

月・水・金曜（公開は金曜のみ）

（十時三十分～十二時、

十三時～十六時）

資料閲覧には事前予約が必要です。